

Title	アルメニア人虐殺1915-16年
Sub Title	The Turkish mass-killing of Armenians, 1915-1916
Author	松村, 高夫(Matsumura, Takao)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2002
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.94, No.4 (2002. 1) ,p.581(17)- 593(29)
JaLC DOI	10.14991/001.20020101-0017
Abstract	
Notes	小特集：マス・キリングの社会史
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20020101-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アルメニア人虐殺 1915—16年

松 村 高 夫

は じ め に

第一次世界大戦中に起こったアルメニア人虐殺は、20世紀最初の大規模な虐殺であった。「1915年に起こったことについて議論の余地はない。オスマン帝国のアルメニア人住民はあらゆる所で家庭から根絶やしにされ、政府が彼らのために選んだ最も遠くて不健康な地域に向けて移送された。ある者は出発のときに殺され、ある者は道中で消され、ある者は目的地に着いた後死んだ。」⁽¹⁾アーノルド・トインビーがこう書いたのは、アルメニア人虐殺の直後だった。虐殺が起こるやいなや、上院議員ブライスはオクスフォードの若き歴史家トインビーにこの虐殺を調査するよう指示した。ブライスは1914年創設の「アルメニア赤十字・難民基金」の会長であった。トインビーの調査はまず小冊子『アルメニア人虐殺：国家の殺人』⁽²⁾として刊行され、さらに多数の証拠を収録してイギリス政府報告書（青書）として発表された。マスターマンの尽力により、⁽³⁾1916年7月ブライスがイギリス外務大臣宛に提出した報告『オスマン帝国におけるアルメニア人の処遇』がそれである。この青書により世界はこの虐殺事件を知ることになった。それはトルコに敵対する連合国側の報告であるが故にバイアスがかかっているとの批判があるものの、現在でもアルメニア人虐殺に関する最良

(1) *The Treatment of Armenians in the Ottoman Empire 1915-16, Documents presented to Viscount Grey of Fallodon, Secretary of State for Foreign Affairs By Viscount Bryce With Preface by Viscount Bryce*, 1916, H.M.S.O., (Miscellaneous No. 31 1916), p. 627.

(2) Arnold Toynbee, *Armenian Atrocities: The Murder of a Nation*, 1915. その revised and enlarged ed. (1915) には、上院でのブライスによるアルメニア人虐殺についての演説が、拡張されて収録されている (pp. 5-14)。

(3) トインビーは1916年6月20日ブライス宛に、138の証拠が集まったが、そのうち34は証言者がまだ不明である。34のうち5は新聞の声明などであり執筆者はわからないだろうが、残りの29は、個々の証人か証人がえた情報なので、最大限努力して明らかにすると書いている。(A Letter from Arnold Toynbee to Viscount Bryce, 1916.6.20, Bryce Papers, no. 202, Bodleian Library, Oxford.) 青書では証拠の出所は明らかにされている。

の史料であることは疑いない。

虐殺当時トインビー以外にも、少数ではあるが外国人がアルメニア人虐殺の情報を得ていた。コンスタンティノブルにいた米国大使モーゲンソーは、1915年4月、突然電信と書簡の検閲が厳しくなったことを感じていたが、すでにその時アメリカ人宣教師など旅行者の目撃談から虐殺の惨状をつかんでいた。「数時間、彼ら（アメリカ人宣教師など）は私の事務所に座って顔に涙を流しながら彼らが通ってきた恐怖について私に語った。その多くは男も女もほとんど健康を害していたと証言した。」⁽⁵⁾同年5月14日、英仏露の連合国は、オスマン帝国がアルメニア人虐殺を広範な地域で実行しているとして、トルコ政府の構成員は虐殺に加担した者と同様に個人としての責任を負わなければならない旨宣言した。⁽⁶⁾

さらに、かつて1895—96年のアルメニア人虐殺のさいに現地調査したドイツ人クリスチャンであるヨハネス・レプシウスも、15年7月にコンスタンチノブルに着き、翌16年にアルメニア人虐殺に関する報告書を作成したが、ドイツ政府を困惑させないために報告書は公開しなかった。⁽⁷⁾

第一次世界大戦後、トルコ政府自身により1918年11月から開始された戦争犯罪の調査と、つづく19年3月の軍事法廷でアルメニア人虐殺が裁かれ、虐殺の実態の一部は明らかにされた（後述）が、その後トルコ政府は虐殺の事実を否認し現在に至っている。⁽⁸⁾

- (4) マスターマンはブライス宛に、「私はアルメニアに関する提案されている青書の全てを読みました。それは文明化の開始以来最もすさまじい話の一つを物語っている確かに驚嘆すべき仕事です。……私は外務省に連絡しましたが、それを公式の青書として出版することを歓迎することは疑いないように思います」と書き、歴史家やオリエント学者に証拠を検討してもらうことをすすめ、さらに「その本の強みはもちろん、アメリカ人などの宣教師からの証拠であり、それらは虐殺と暴行の最もセンセーショナルな証拠のいくつかを含んでいることです。アルメニア人による証拠は補足的なものであり、そのような証拠だけではおそらく世界的には受け入れられないでしょう」と書いている。（A Letter from Charles H. Masterman to Viscount Bryce, 1916.6.14, Bryce Papers, no. 153.）

- (5) Henry Morgenthau, *Ambassador Morgenthau's Story*, N.Y., 1918, pp. 327-28, quoted in Leo Kuper, *The Turkish Genocide of Armenians, 1915-1917*, in Richard G. Hovannisian ed., *The Armenian Genocide in Perspective*, New Brunswick and London, 1997 (5th print.), p.45.

- (6) Richard G. Hovannisian, *Armenia on the Road to Independence*, UCP, 1967, pp. 51-51, quoted in Kuper, *The Turkish Genocide*, p. 45.

- (7) Johannes Lepsius, *Deutschland und Armenien: Sammlung Diplomatischer Aktenstuecke*, Berlin-Potsdam, 1919. レプシウスの秘密報告のフランス版は、1919年パリで Pinot の序文を付して刊行された（Kuper, *The Turkish Genocide*, p. 58, fn.10, 13.）。

- (8) トルコ政府のアルメニア人虐殺の否定に関連して、1975年—83年にトルコの外交官など26人が、ロスアンジェルス、ボストン、ロンドン、パリ、ローマ、マドリッド、ヴェニス、シドニーなどで武装アルメニア人組織による15回のテロにより殺された。（Gerard Chaliard, *The Armenians: From Genocide to Resistance*, London, 1983 (French ed. 1981), pp.3-5. アルメニア人虐殺を否定する書としては、例えば、Halil Kemal Turkozu, *Armenian Atrocity, According to Ottoman and Russian Documents*, Ankara, 1986 がある。2001年1月、フランス議会がアルメニア人虐殺を歴史事実として認定したところ、トルコ政府が反発して両国の通商に弊害がでるにいたったことは記憶にあたらしい。

一 アルメニア人虐殺の歴史的背景

オスマン帝国は多民族多元的国家であったが、19世紀にすでにキリスト教徒のアルメニア人の存在はアキレスの踵だった。何故トルコ人とアルメニア人の対立だけが、虐殺に帰結したのか。アルメニア人は帝国東部に集中していた。ブライスの論考（1878年）によれば、オスマン帝国には200万人近いアルメニア人キリスト教徒がいたが、それ以上の数と推測されるイスラム教徒は異なった人種、言語に分かれていたので、アルメニア人が全人口のなかで最大の集団を形成していた。⁽⁹⁾

第一次世界大戦前（1912年）のオスマンのうち6州だけのアルメニア人分布をみると、エルズルム21万3千人、ヴァン18万5千人、ビトリス18万人、マモレウラジス16万8千人、ディヤルバクル10万5千人、スィヴァス16万5千人であり、合計101万8千人を数え、アルメニア人は6州全体の人口261万5千人の38.9%を占めていた。ついでトルコ人は25.4%、クルド人16.3%の順であったから、アルメニア人が4割近くを占め最も多かったのである。宗教別にみると、アルメニア人の全てとギリシャ人などを含めキリスト教徒は45.2%を占め、他方イスラム教徒はトルコ人、クルド人などで45.1%を占めており（残りの9.7%は種々の宗教）、両教徒は同数であった。⁽¹⁰⁾ この6州では、けっしてアルメニア人（＝キリスト教徒）は少数派ではなかったのである。

第一次世界大戦中のアルメニア人虐殺に先行するものとして、アブデュルハミト二世時代の1894～96年にビトリス州サソンの虐殺（1894年）、イスタンブールの虐殺（1895—96年）などがあったが、この時はクルド人が虐殺の下手人として使われた。この虐殺の特徴として、男子が対象とされたこと、短期間（2～4日間）で起こったこと、居住地や職場の近くで起こったことが挙げられる。⁽¹¹⁾ これは第一次大戦中の虐殺の前史ではあったが、まだ全般的な移送や虐殺ではなく、後の虐殺に比べると、「アマチュア的で効果の薄いもの」（トインビー）であった。

1906年のナージムとサーキル両博士が署名した秘密書簡では、アルメニア人をトルコとカフカスのイスラム教徒の敵とみなし、アルメニア人を「然るべく扱う」と書かれている。また、7年12月には、サーキルはそれ以前に結んだアルメニア人との協定は今後は無効であるとした。⁽¹²⁾ ナージムとサーキルの二人は1915年のアルメニア人虐殺を企画し、1919年のトルコ軍事法廷で不在なまま死刑を宣告されることになる人物である。

(9) James Bryce, "The Future of Asiatic Turkey," *Fortnightly Review*, vol. 138, 1 June 1878.

(10) Bryce, *The Treatment of Armenians*, p.661 の表 Annexe D による。数値はアルメニア総主教による1912年のもの。

(11) Vahakn N. Dadrian, *Warrant for Genocide: Key Elements of Turko-Armenian Conflict*, New Brunswick, New Jersey, 1999, pp.85-92.

(12) Quoted in Dadrian, *Warrant for Genocide*, p.94.

アブデュルハミト二世の専制政治に対し19世紀末には抗議する者が結集しはじめるが、その一つが「青年トルコ人」であり、1908年7月に「青年トルコ人革命」により30年間の専制政治が打倒された。だが、革命直後は「青年トルコ人」は政権に加わらず、マケドニアの主要都市サロニカを中心とする「統一と進歩のための委員会」Committee of Union and Progress (CUP) からは、9年6月にジャーヴィトが財務大臣に、8月にタラートが内務大臣として入閣しただけであった。また、当時は表面化しなかったことだが、1910年11月の「青年トルコ人」のサロニカ会議の決定が重要である。この会議は1910年のマケドニアとアルバニアにおける緊張をどうするかが主要な課題であったが、アルメニア人虐殺の引き金になる決定をしているからである。サロニカのイギリス総領事ハリー・ラムによ⁽¹³⁾ると、すべて重要なことは政府の裏で秘密裏に決定されていた。1910年11月22日、イスタンブールの英国大使チャールズ・マーリングの英国外務大臣グレイ宛の書簡では、「公開された決定の他に内部の作業を促進するための秘密の決定があると思われる⁽¹⁴⁾」と報告している。

決定は本会議終了後、ナージムを含む5・6人の指導者により秘密裏になされた。「もっとも際立った人物であり主導者である」ナージムは、「最後の手段として、キリスト教徒の大量虐殺を命じる⁽¹⁵⁾」用意があった。ナージムはバルカンと先の「6つのアルメニア人州」、とくにエルズルム州にロシアとペルシャの国境を越えて入ってくるイスラム教徒を大規模に再定住させることを予算化させた。この再定住を通してナージムは全土を「トルコ人化」することを計画したのである。その汎トルコ主義は、当然アルメニア人虐殺の伏線となっていた。

1912年10月バルカン戦争が始まり、オスマン軍が劣勢となり、CUPの本部のあるサロニカが陥落するなかで、13年1月、エンヴェル率いる部隊が「大宰相府襲撃」のクーデタを起こした。同年5月のロンドン平和会議調印、6月の大宰相暗殺を経て、イスタンブール軍政長官ジェマルが強硬に反CUPを弾圧し、サイト・ハリム・パシャを大宰相に据え、CUPの内閣をつくり、ここにCUPは革命以来5年かかってようやく権力を得たのである。このエンヴェルとタラート、ジェメル、ナージムが15年にアルメニア人虐殺の命令をだすことになる。

1913年9月に開催されたCUPの第五回会議において、非トルコ系民族に対する融和政策が採択されたが、同じころ、同年8月15日に「特殊部隊」(チェッティス)が結成されたことは重要である。エンヴェルはCUPの行政機関として移送と大量虐殺を目的とした「特殊組織」の設置を命じた。その組織はナーズムとバハーエッティン・シャーキルが指導したものであり、特別の規定、基金、基幹人員、武器、弾薬を整備したものだが、「特殊組織」は半ば自律した「国家のなかの国家⁽¹⁶⁾」と

(13) A Report of Harry Lamb, British Consul General at Saloniki, 1910.12.16, FO 420/250, p.4; FO 195/2359, folio 338, quoted in Dadrian, *Warrant for Genocide*, p.98.

(14) A Report of Ambassador Sir Charles Marling to Sir Edward Grey, 1910.11.22, FO 371/1017, section 2, p.1, quoted in Dadrian, *ibid.*, pp.98-99.

(15) A Report of Harry Lamb, 1910.11.19, FO 195/2359, No. 149, quoted in Dadrian, *ibid.*, p.98.

して機能した。内務大臣と法務大臣の特免により監獄から釈放した犯罪者を1ヶ月訓練したのち「特殊組織」の隊員としてカフカスなどの前線に送り、アルメニア人虐殺を実行させることになる。⁽¹⁷⁾内務省の憲兵隊も移送者の「保護」を名目に派遣され、虐殺に加わった。「特殊組織」の実態は当時厳秘とされ、18年11月4日、休戦の5日後にトルコの新聞が報じて初めて明るみにでたもの⁽¹⁸⁾で、犯罪人釈放の事実が詳細に明らかになったのも戦後の軍事法廷においてである。

トルコのロシアとの関係はとくに、アルメニア人虐殺の要因として重要である。内相タラートはロシアとの和解を試み、1914年2月にアナトリア東部のアルメニア人居住地域の改革促進とそれを監視する国際監視団の派遣などを協定した。一方、エンヴェルとタラートは対独交渉も秘密裏にすすめ、同年8月1日のドイツの対露宣戦布告の翌日、秘密協定がタラート、エンヴェルら4名だけで署名された。ドイツ軍にとってオスマン軍はカフカス戦線およびスエズ運河攻撃の計画にとって重要であった。東部アナトリアでは、11月に始まったロシア軍の侵攻がオスマン軍によりくい止められていた。汎トルコ主義者エンヴェルによってカフカスへ進軍する計画が立てられ、12月末に9万のオスマン軍が厳冬のなかを越境したが、結果的にはロシア軍の反撃をうけてエルズルムまで敗走し、生還したものわずかに1万2千人という状態であった。この敗走は15年春以降ロシア軍に攻勢をもたらし、東部アナトリアのアルメニア人には独立の機会が到来したかにみえた。東部諸州への国際監視団の派遣は大戦勃発により凍結されており、侵攻してくるロシア軍への数千人規模のアルメニア人の参加、オスマン軍からのアルメニア人の脱走は、オスマン帝国にとっての脅威となった。そして15年から内務大臣タラートと軍事大臣エンヴェルが指令をだし、トルコを脅かす「内なる敵」アルメニア人の虐殺がはじまったのである。これはトルコ人の自然発生的行動のようにみえるが、明白な計画的な国家犯罪である。

二 虐殺の実態

虐殺は1915年春、アルメニア人をトルコの東部諸州からアレppoのあるシリア砂漠に向けて「移送」することにより始まった。だが、虐殺の予兆はすでに同年2月、オスマン軍とともに行動していたアルメニア人が武装解除を命じられ、移動を禁止されて労働隊に編入されたことに現れた。つ

(16) C. Kutay, *The Special Organization During World War I*, Istanbul, 1962, p.38.

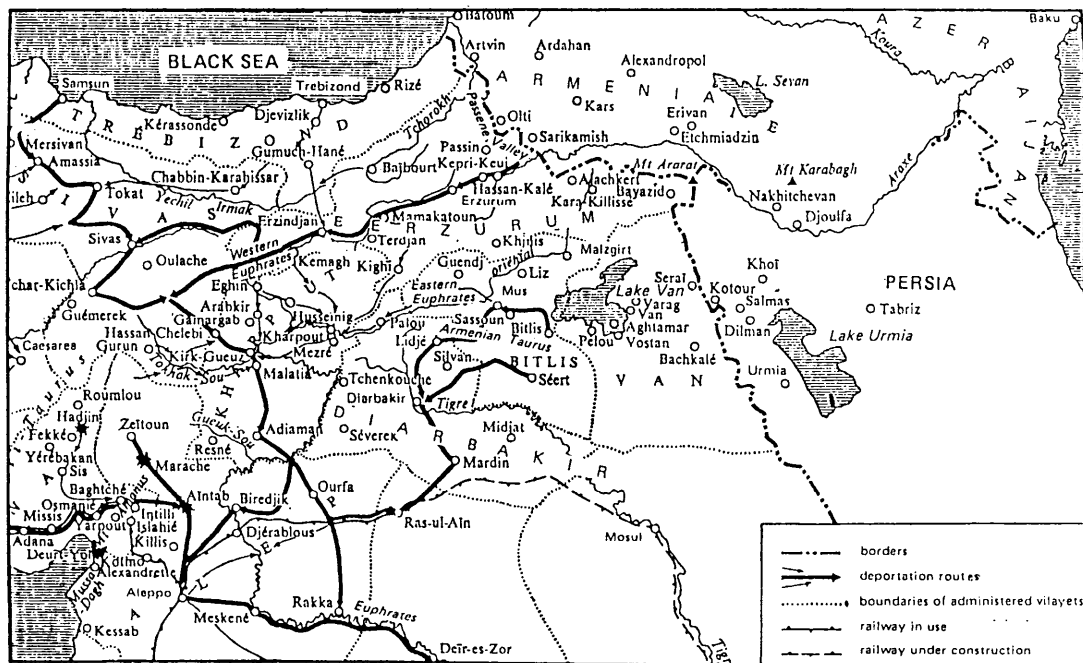
(17) 「特殊組織」については、T. Tunaya, *The Political Parties in Turkey*, vol. 1, Part 1, Istanbul, 1984 (2nd ed.), pp.275-92; Lepsius, *Deutschland und Armenien*, p.111; A Yalman, *The Things I Saw and Heard in Recent History*, vol. I, Istanbul, 1970, p. 331; A Toynbee, *The Western Question in Greece and Turkey*, Boston, 1922, pp. 165-66, 278-80. Dadrian *The History of Armenian Genocide*, p. 236, p.244, fns. 7, 8, 9 を参照した。

(18) *Hadisat*, Istanbul, 1918.11.4, quoted in Dadrian, *ibid.*, p.238.

づいてアルメニア人市民からも武器が取り上げられた。最高理事会は1915年3月1日に議会を停止し独裁政党（イチハド党）となり、移送を促進した。内務大臣タラートはアルメニア人市民を、軍事大臣エンヴェルは労働隊を担当した。3月25日、イチハド委員会はアダナの「代表」（イチハドが各地方においた「責任書記」と称された者）宛に次のような指示をだした。「トルコにおいてイチハドとテラケ〔CUPのこと、Jemietとも呼ばれた〕の政治生命を挫折させる唯一の勢力はアルメニア人である。……もし過去の歴史的状況を逐一調べるならば我々はJemietの愛国的努力を妨害する嵐はアルメニア人が撒いた不和の種の結果である。いかなるアルメニア人を助けたり保護したりすることは禁じられるだろう。Jemietは祖国をこの呪わしい人種から救うこと、および、オスマン史を暗黒にする汚点を責任を持って取り除くことを決定した。すべての古い記録を忘れることのできないが未来の希望に満ちているJemietは、トルコに住む全てのアルメニア人を一人の生存者も残すことなく絶滅することを決定し、政府にこれに関する広範な機会を与えた。⁽¹⁹⁾」

15年4月8日、「移送」はザイツンなどの人口密集地から始まり、まずアルメニア人労働隊が軍隊に包囲され虐殺された。4月24日には内務大臣の命令により、アルメニア人地域社会の指導者た

トルコにおけるアルメニア人の「移送」



出典：Yves Ternon, *The Armenians, History of a Genocide*.

Gerard Chaliand, *The Armenians: From Genocide to Resistance*, 1981 (English ed.), p.13 より転載。

(19) Aram Andonian comp., *The Memoirs of Naim Bey: Turkish Official Documents relating to the Deportations and Massacres of Armenians*, London, 1919, pp.49-50.

ち数千人——エリート、著述家、政治家、公務員など——が逮捕された。イスタンブルだけで数百人の指導者が投獄され、のちに殆どが処刑された。現在でもこの4月24日を世界中のアルメニア人が虐殺の日として追悼している。

臨時移送法は1915年5月に内閣評議会で決定されたが、その第4条は軍事大臣に移送を実施させる条項であった。それはすでに始まっていた「移送」を追認したものである。米国大使モーゲンソーは、トルコ人たちは追放された者たちの大多数が決してその目的地に着くことはないし、着いた者も乾きと飢えで死ぬか、「野蛮なイスラム教徒の砂漠の部族」に殺されるかを知っていた、という。「移送の真の目的は窃盗と破壊であった。それは真に大量虐殺の新方法を代表していた。トルコ当局がこれらの移送の命令を与えたとき、かれらは人種全体に死の令状を与えただけだった。彼らはこのことを良く理解しており、わたしとの会話でその事実を隠す特別の試みはしなかった。」⁽²⁰⁾

ブライスは次のようにも指摘している。「[トルコ政府の] 殺戮と移送の政策は無慈悲であり、いわれのないものである。それはアブデュルハミトがかつて発言した『アルメニア問題から逃れる方法は、アルメニア人を排除することである』という公理の単なる適用であるようにみえる。抹殺政策はトルコ現政権の指導者達——統一と進歩の委員会 CUP と自称している——によって、アブデュルハミトの時代よりもより徹底的に、より血に飢えた完璧さでなされた。」⁽²¹⁾

いま少し、虐殺の具体例をみてみよう。

レプシウスは、アメリカ人の次のような証言を記している。「ユーフラテス河に沿って散在するキャンプをとおり私の旅で受けた恐ろしい印象のイメージを示すことは不可能である。私は河の右岸の土手を歩いた。キャンプについて話すことは不可能である。家と土地から野蛮に駆り立てられ、家族から離され、持ち物はすべてを奪われ、道中運んでいたすべてが略奪されたこれら悲惨な人々の大多数は、暑さや寒さに対してなにも防護するものがない空の下での家畜のように群がっていた。ほとんど服はなく、全く不規則でしかもいつも不十分な食事があるだけだった。天候の変化、砂漠の灼熱の太陽、春秋の風雨、冬の極寒にさらされ、極度の欠乏により弱り、果てしない行進、嘆かわしい扱い、残酷な拷問、生命に対する絶えざる怖れによって徐々に弱っていき、少しでも余力のある者は、河川の土手に穴を掘りそこにもぐり込んだ。……

全体の人口を砂漠に移送する手段がとられたとき、何ら栄養については適切な措置はなされなかった。反対に、政府が人々を餓死させる計画を追求したのは明白である。」⁽²²⁾

(20) Morgenthau, *Ambassador Morgenthau's Story*, pp.309, quoted in Vahakn D. Dadrian, *The Story of Armenian Genocide*, Oxford, 1995, p.225; Kuper, *The Turkish Genocide of Armenians*, pp.47-48.

(21) Toynbee, *Armenian Atrocities*, pp.12-13.

(22) Dickran H. Boyajian, *Armenia: The Case for a Forgotten Genocide*, Westwood, N.J., 1972, pp. 117-24. The report is contained in Lepsius, *Deutschland und Armenien*, quoted in Kuper, *The Turkish Genocide of Armenians*, p. 51.

ドイツの新聞 *Sonnenaufgang* (1915年10月) などに載った次のようなバグダッド鉄道の従業員の情報は、ドイツの検閲をくぐりぬけた情報という意味で貴重である。15年5月10日と30日のあいだに1200人のアルメニア人とキリスト教徒がディヤルバクルとマムレアラジス州で逮捕され、モスルにつれて行かれたといわれるが消息不明である。5月30日にはそのうち673人がチグリス河の船に乗せられモスルまでいくと騙され、船に乗るや金品や衣服を盗られ、その後河に投げ込まれた。テルアルメン村(バグダッド鉄道沿線のモスルの近くにある)とその周辺では、約5000人が鉄道から25.6キロ離れた土地に入植させると騙されて連行され、数人の女子供を残して全員が生きたまま井戸や火のなかに投げ入れられて虐殺された。「ビレジクの監獄は[アルメニア人で]毎日昼間いっぱいになり、ユーフラテス河に捨てたので夜になると空になった……アレppoとウルファは移送団の集結地である。15年6・7月には約5000人がおり、4～7月は5万人以上がアレppoを通過したにちがいない。少女はほとんど例外なく兵士とそのアラブ人の取り巻きに誘拐された。」マラシュとアレppoの間では双子を出産した女が翌日行進を強制され、子供達を藪の中に置き去りにせざるをえず、彼女もまもなく死んだ。行進中に主要道路を離れ山を越えて移動するようにと突然命令があり、暑い年だったので多くが死んだ。3万人の「移送」された者のなかでアレppoやウルファに着いたという情報は入っていない。⁽²³⁾

内務大臣タラートは、虐殺の命令をだしつづけた。1915年11月23日にタラートはアレppoの政府に対して、「あなたの手中を通過する東部地方のアルメニア人を秘密の手段で破滅せよ」と命令しているし、15年12月29日には「上記の人々(アルメニア人)の死体を路上で多数の外国人が見て、その死体の写真を撮っていると聞いている。これらの死体はすぐに埋められること、さらしたまま放置しないことをきわめて重要なこととして推奨する」と指示している。⁽²⁴⁾

S. G. ウィルソンは、カフカスのエリヴァンから1915年12月29日に10万5千人のアルメニア人難民がでていると伝え、16年2月4日には23万4400人の難民がでている(カフカスには18万2800人、トルコ占領地域に1万2100人、アゼルバイジャンに3万9500人)と伝えた。そして15年7月8月の虐殺の結果、「アルメニア人4万人がロシアに着いたのち病気で死んだといわれている」とも書いている。クルパロ村の難民キャンプにいた「7、8人に囲まれ、全員にはベッドがなくぼろをまとっている一人の女が、『私は死んだ子供と頭にのせて命からがら逃げた。家族は40人いたが、9人の女と子供がクルド人に捕まった』と述べた。ウィルソンは、クルパロ村の600人の難民のうち約30人が男だった。そのうち何人かは兵隊で、虐殺が起こったとき軍隊にいた。その一人は大量の死体のなかから這い出してきた。すべての女が死を免れなかった。女達は無慈悲に殺害された。子供のいる女

(23) Bryce, *The Treatment of Armenians*, pp.25-27. ブライスの青書にはこのような証言が多数収録されている。

(24) Andonian comp., *The Memoirs of Naim Bey*, pp. p.54-55.

は剣で切り裂かれ、そうでない女性は胸を切り取られた。何人かは暴行を逃れるため彼女自身とが子供たちと水中へあるいは絶壁から身を投じた」⁽²⁵⁾と伝えている。

トインビーはトルコの各地方のアルメニア人虐殺について詳述したのち、次のように総括している。「この調査を振り返ってみると、我々は中央政府の全般的計画を識別できる。即ち、[1915年]4月5月はキリキアからの一掃が割り当てられた。6月と7月には東部が指定された。8月と9月は鉄道沿線の西部の順となり、同時に南東部の辺地のアルメニア人地域にも拡大された。それは、オスマン帝国全体からアルメニア人を根絶する意図的で組織的な試みであった。しかし、統計の形で結果を示すことは、概数であっても容易ではない。」⁽²⁶⁾国家権力による計画的虐殺なのである。

これらの虐殺がCUP指導者の命令によるものであったことは、Jemietから1915年11月18日付けでアダナの責任書記にだされた次のような指示によっても明らかである。「アルメニア人の存在を一掃するという気高い計画を広範に効果的に実行する事は我々全ての義務である。アルメニア人は帝国の文明化の進歩にとって数世紀にわたって障害になってきたからである。……2月8日付けの我々の指示で宣言されたよう、Jemietは数世紀にわたってこの道の障害になってきた様々な勢力を根絶やし絶滅することを決定している。最終的にはきわめて血なまぐさい方法に訴えることを余儀なくされる。我々自身がこのような方法をよくみるとぞっとするのは確かだが、しかしJemietはそのしごとの安定性を確保するために他に道はないとみなしている。我々は批判されて⁽²⁷⁾おり、慈悲心を持つよう求められている。そのような単純さはばかげたことである。」

ニューヨークの法律家 V. Cardashian が、1916年3月3日にブライス宛の書簡で、前日にモーゲンソーと会見したことを書いている。モーゲンソーは、「殺人、飢え、寒さなど、多くの原因で死んだアルメニア人の数は計80万人に及ぶだろう。……帝国のアルメニア人に対するトルコ政府の態度は概して受け身である。三つの主要な集中キャンプは、アンカラ、コニン、シリア地方にあるが、前2者がまずまずだが、最後のキャンプの状態は非常に劣悪である。」と述べ、「アルメニア人の迫害の宣伝でトルコ政府はほんのわずかでも正当化できるのか否かという私の直接的質問に対し、モーゲンソー氏は絶対的に否定的な回答をした。彼は全てのことが事前に計画されていたと指摘し⁽²⁸⁾た。」

トインビーも、その報告書を次のように結んでいる。「諸々の点で中央政府がその [大量虐殺の]

(25) S. G. Wilson's Report from Erivan in Transcaucasia, 1915. 12. 29, Bryce Papers, no. 210. ウィルソンは、The American Committee for Armenian and Syrian Relief のメンバーで、同委員会の地方本部チフリスにいたが、引用した文はエリヴァン州のアルメニア人難民を視察したのちエリヴァンから伝えたものである。

(26) Bryce, *The Treatment of Armenians*, p.648.

(27) Andonian comp., *The Memoirs of Naim Bey*, pp.51-52.

(28) A letter of V Cardashian, Counsellors at Law, N.Y., to Viscount Bryce, 1916.3.3, Bryce Papers, no. 202.

計画の概念を創造して、計画の実施を強制し統制した。コンスタンティノブルの青年トルコ人大臣たちとその協力者たちは、1915年に近東を破壊した巨大犯罪に一貫して、直接、個人的に責任がある。⁽²⁹⁾」

三 トルコの虐殺弁護論とトインビーによる批判

トルコ側は当時虐殺に対し3つの弁護論を展開していたが、トインビーはそれらを何れも「検討に耐えられない」としている。第1は、ロシアがオスマンの前線を越えるや否やアルメニア人が武装しロシア軍に加わった、とするものである。「ヴァンにおける蜂起」がその顕著な例とされ、それ故アルメニア人を虐殺したのだという主張である。しかし、トルコがヴァンで最初に発砲したのは1915年4月20日であり、ザイツンからのアルメニア人の「移送」が始まったのは4月8日であり、彼らは19日にはシリアに着いているという記録がある。たしかにムシュなど数カ所でアルメニア人による抵抗が起きトルコ軍により弾圧されるが、「これらはすべて移送の結果であり、その原因ではない。⁽³⁰⁾」

弁護論の第2は、オスマン軍が前線に動員されているときに、帝国全体にわたりアルメニア人が革命を起こし、トルコを連合国側に引き渡すというという陰謀があった、とするものである。連合国軍がギリキアに上陸したときに革命を起こすとされたが、そのような上陸はなかった。また、ダーダネルス海峡に上陸したときに革命を起こすともされたが、実際1915年3月、英仏連合艦隊が同海峡へ強行突入して上陸したときに革命など起こらなかった。（この艦隊はオスマン軍の砲撃を受けて撃退され、同年4月、8万弱の英オーストリー連合軍をガリポリ半島に上陸させたが、再び反撃され、16年1月には同地域から撤収した。）20歳から45歳まで（すぐに25歳から50歳までに拡大）のアルメニア人は軍隊に徴用されていたし、残された成人男子は少なく、十分な武器も所持していなかった。というのは、14年から15年にかけての冬にオスマン当局はアルメニア人の各戸毎に武器の搜索を実施し、武器を取り上げていたからである。

弁護論の第3は、アルメニア人がロシア領に移りロシア軍の義勇兵となったことへの復讐である、とするものであり、弁護論者がもっとも好んで使う主張である。たしかに、アルメニア人が分断され、露土両国が戦争する状態は不幸であるが、アルメニア人の一部がロシアの側についたのは、彼ら自身が決定したことであり、トルコ人の関知することではないはずだ、とトインビーは主張する。逆に、数年前にアダナでアルメニア人を虐殺したトルコ人のために、アルメニア人は義勇兵になることができるだろうかと問うている。⁽³¹⁾

(29) Bryce, *The Treatment of Armenians*, p. 653.

(30) *Ibid.*, p.629.

(31) *Ibid.*, pp. 627-36.

四 虐殺の犠牲者数の推計

トインビーは虐殺の規模を次のように推計している。オスマン帝国におけるアルメニア人は19世紀半ばには250万人であったが、第一次世界大戦勃発までに虐殺や移住により160万人に減少していた。この160万人という数値は、コンスタンティノブルのアルメニア総主教の前出の調査（1912年）の210万人とオスマン政府の最新公式統計110万人を単純に平均したものである。トインビーは160万人から200万人の間と推計している。⁽³²⁾（ホヴァニシアンは150万人と200万人の間と推計している。）これに対しトルコ政府は130万人以下であるとして、虐殺数を小さく見積もっている。

次に、移送を逃れたアルメニア人についてであるが、正確な統計はないものの、それを60万人以下と推計している。例えば、18万2000人がロシア領カフカスへ、4200人がエジプトへ逃れたというように国外に移住した者、「移送」されなかったスミルナとコンスタンティノブルのアルメニア人（コンスタンティノブルでは15万人が住みつづけた）、カソリック、プロテスタント、イスラム改宗者のように「移送」されなかった者である。反対に、ザイツン、ハジン、スィヴァス、エルズルムのような都市では、虐殺や移送による一掃はほぼ完璧になされた。例えば、エルズルムでは2万人いたアルメニア人が、一掃後はわずか100人になった。先のアルメニア総主教の調査ではエルズルム、ビトリス、ヴァンには合計58万人のアルメニア人がいたが、1916年4月のアメリカ救援委員会の報告では、僅かに1万2100人にすぎない。

最後に、残りの少なくとも100万人のアルメニア人が移送または虐殺されたことになるが、その数は多分120万人かそれ以上だろうとする。そして、資料が少なく一般化することは危険であると断りながらも、その約半数の50万人から60万人が虐殺されたとする。（『アルメニア人シリア人救援アメリカ委員会』（本部ニューヨーク、会長 J. L. パートン）の独自の推計によると、アルメニア人犠牲者は⁽³³⁾45万から80万の間である。）

地域による差異は大きかった。ヴァンやビトリスでは移送は全く行われず、虐殺のみだった。他のエルズルムやトラブゾンのような他の地域やアンカラでは、移送と虐殺は半々だった。キリキアでは、砂漠のなかを行進させることにより、目的地に着く前に死亡するという方法が採られた。その極端な例を挙げると、マラティアを出た約1万8000人は、ヴィラン・シェフルに着いたときには301人に、最終目的地アレppoに着いたときには150人であった。また、ハルプトを出た約5000人は、アレppoに着いたときは213人であり、途中で⁽³⁴⁾96%が死亡した。これらは極端な例であるが、平均

(32) Hovannisian, *Armenia on the Road to Independence*, pp.34-37.

(33) Latest News Concerning the Armenian and Syrian Sufferers, April 5 1915, *Bulletin* 4, p.7.

(34) Bryce, *The Treatment of Armenians*, p. 650.

すると50%前後が死亡したと推測されている。こうしてトインビーは、移送を逃れた者60万人、移送されたなかで生き残った者60万人、計120万人のアルメニア人が虐殺事件後も生存しているとしている。

当時としては可能なかぎりの推計であったが、虐殺60万人というトインビーの推計値は1915年冬までの数値である。その後生じた虐殺を含めると、その数値はさらに大きくなる。アラム・アンドニアン報告によると、18年のカフカスでの虐殺、22年のスミルナでの虐殺などを加えると、アルメニア人虐殺数は合計100万人に上ると推計⁽³⁵⁾されている。戦後にトルコ内務大臣が発表した公式数値でさえも、殺害された者は約80万人としている。

五 軍事法廷（1919年）

1918年10月30日オスマン帝国は停戦条約に署名し、19年1月のパリ講和準備会議は「責任と処罰に関する委員会」を設置し、その活動は「戦争の野蛮で違法な方法」を実施した国を調査し、「戦争の法と慣習および人道の原則にたいする違反」を調査することとした。その国のなかにはオスマン帝国も含まれていた。同委員会の「尽力」により20年8月10日セーヴル条約が結ばれ、アルメニアは独立するが、条約第230条は虐殺に関わった人々の裁判と処罰を求めたものであり、戦争犯罪を裁くという意味で、ニュールンベルグ裁判への道を拓いたものであった。「1914年8月1日にトルコ帝国の一部を形成する領域でなされた戦争状態が継続するなかでなされた虐殺に対する責任」をトルコが負わねばならないとしたのである。だが、国際裁判は結局は実施されなかった。ムスタファ・ケマルのトルコ・ナショナリズムの台頭により、18年11月12日、CUPの指導者、タラート、エンヴェル、ジェメル、ナーズムがイスタンブールから国外に逃亡したからである。そのため裁判は戦後国内でオスマンがCUPを裁く軍事裁判という形で開かれた。あえて軍事裁判が行われた理由は、講和会議でのアルメニア人虐殺への非難を弱めるためであり、また、戦後権力を得たダマト・フェリトなどはCUPとは無縁な人達であり、彼らは「青年トルコ人」による犠牲者とともに虐殺を告発できる立場にあったためである。⁽³⁶⁾

タラートたちが国外に逃亡した翌日、1918年11月13日、行政調査委員会が設置され、同委員会に

(35) Vahakn N. Dadrian, *The Documentation of the World War I Armenian Massacres in the Proceedings of the Turkish Military Tribunal*, 1991, p.552. この80万人という数値はまた Yuasuf H. Bayur, *The History of the Turkish Revolution*, vol.3, Part 4, Ankara, 1983, p.787 によっても確認されている。ムスタファ・ケマル自身もアルメニアへのアメリカ軍事派遣団長ハーボードとの1919年9月のやりとりのなかで虐殺数80万人を認めている。Yakin Tarihimiz, 3, 1962, p.179. Dadrian, *The History of Armenian Genocide*, p.233, fn.40 を参照した。

(36) 軍事法廷に関しては、Robert F. Melson, *Revolution and Genocide: on the Origins of the Armenian Genocide and the Holocaust*, UCP, 1992, pp.148-52 による。

虐殺に関する調査、逮捕、拘留ができるとする強力な権限が与えられた。CUP が発した命令や、秘密の決定や「特殊組織」の行動が調査され、19年1月までに CUP 高官など130人の被疑者ファイルが作成された。同年3月8日には軍事法廷開催の法律が制定され、法廷は「虐殺、および違法な私的暴利取得者を裁くこと」、同時に「トルコを戦争に巻き込んだ責任を追求すること」を目的とするとされた。裁判長は公開裁判とすることを主張した。「ジェノサイド」という用語こそ未だ使用されていないが、虐殺とは「アルメニア人の絶滅」であり、CUP の指導者が「絶滅」計画を樹てたとして糾弾された。具体的に糾弾の対象となったのは、CUP の中央委員会、総会、地方統制組織、国防省（とくに「特殊組織」）、内務省であった。地方統制組織の責任書記は、CUP が樹てた「絶滅」計画を実施した者として糾弾された。この軍事法廷によりアルメニア人虐殺の事実が次々に表面化したことは、ある意味では皮肉な結果だったといえる。

1919年7月5日に下された判決では、アルメニア人の「絶滅」を試みたこと、トルコを戦争に巻き込んだことの2点で、CUP の指導者、タラート、エンヴェル、ジェメル、ナーズムに死刑を、他の被疑者には15年強制労働を宣告した。だが、死刑判決を受けた4人は国外逃亡で不在であり、他の者への判決も実施されなかった。それは、アンカラの政府がイスタンブールのスルタンと併行して合法性を得ており、ケマリストが判決を拒否したからである。イスタンブールではなお CUP の一部が活動を続けていたという状況もあった。こうしてアルメニア人虐殺は歴史のなかで伏せられていき、前述したように現在でもトルコ政府は虐殺を認めていないが、しかし、一度はトルコ政府がその虐殺を認めたという点は重要であろう。

トインビーは晩年に書いた回想録のなかで、当時の「青年トルコ人」に対する批判を撤回し、イスラム文化がキリスト教文化より多くの虐殺を行なったという自説も撤回したが、アルメニア人虐殺をナチス・ドイツの虐殺と比較してこう書いている。「それ〔アルメニア人虐殺〕は CUP の犯罪であった。それについての私の研究は、ナチスにより第二次世界大戦中に実行された、より大規模な、より冷血なジェノサイド⁽³⁷⁾によって影が薄くなることはない、という印象を私の心に残した。」

（経済学部教授）

(37) Arnold J. Toynbee, *Experiences*, OUP, pp.241-42.